

ずいそう

インドネシア駐在の思い出

藤本 純



私は2014年8月～2019年7月の5年間、インドネシアにて建設機械レンタル会社を立ち上げるミッションで駐在していた。私がこの駐在で感じたことを紹介したい。

まず、インドネシアとはどういう国か、皆さんご存知だろうか。世界最大のムスリム(イスラム教の信者)人口を有する国というイメージを持つ方が多いだろうが、インドネシアは実は多宗教国家だ。人口2億6,400万人(世界第4位)の約9割がイスラム教と圧倒的にムスリムが多いが、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教の信者も存在しており、クリスマス等、イスラム教以外の宗教に由来した祝日も多い。これは1945年にスカルノ初代大統領がさまざまな宗教や地域に帰属する300を超える民族を纏めてインドネシア独立を目指した際に述べた「多様性の中の統一」(パンチャシラ)という精神から来ている。少数勢力や弱者に優しい法律が多く存在する一方、実態はまだまだ貧富の差が激しく、本音と建て前が入り交じった国、という印象を私は持っている。

インドネシアは、1949年に国際法上の独立承認が為された国で、まだまだ若く未成熟な国だ。現在でもアセアンの約35%のGDPを占める大国だが、若者が多く天然資源も豊富で経済的な成長ポテンシャルは高い。未成熟さから来る危なっかしさの中でまっしぐらに成長を続ける様子は、日本と対照的で私を含めこの国に魅了される日本人は多い。

そんなインドネシアに私が赴任して初めに感じたのは、インドネシア人はいつも笑顔でいるということだ。知らない人から笑顔を振りまかれることに最初は戸惑ったが、皆が皆とても素敵な笑顔で接してくれるので、私も自然と笑顔で人と接する様になった。日本では知らない人に笑顔を見せると変人と思われるかもしれないが、笑顔は笑顔を呼び、人と打ち解けるのも早くなる。「建て前」ではないか、と思うような笑顔も一部あったが、そうであったとしても素晴らしい文化だと思った。日本人も見習うべきだ。

インドネシアの建設現場についても紹介したい。建設現場は安全性が低いという印象をお持ちだと思うが、その通りである。大学でもHealth(健康) Safety(安全) Environment(環境)を専門とするHSE学部が一般的だったり、政府公認の安全資格があったりと、

形式的な仕組みはあるのだが、実践においては安全を履き違えている印象を受けた。建設現場の安全性を高めるために、日本であれば危険予知を習慣化させる取組みを実施する等、ソフトな仕組み作りに重点を置くが、インドネシアでは現場毎に建設機械の年式規制を設けたり、各種証明書の提出を求めたり、多くのルールを作ってハード面の安全性を担保しようとしている様に感じた。安全を学問として勉強し、ルールを作ることが目的化しているため、私が本質的に重要だと考える「一人一人の高い安全意識」に向けた取組みが不足していると感じた。状況が目まぐるしく変わる建設現場において本当の意味で安全を突き詰めるには、学校の先生では無く、現場の先生が求められている。そういう意味で、日本を含めた安全先進国が関連した案件はインドネシアの安全な成長を促すために必要不可欠だと思う。

インドネシア駐在時代には、一つの巨大な建設現場の影響で周辺の村が瞬く間に発展する様子を見たり、地熱発電現場近くで生温い天然温泉(インドネシア人は熱いお湯が苦手)に浸かったりと、掛け替えのない経験や珍道中を数多く経験させて貰ったが、その中でも最も印象に残っているのがインドネシアの最東端に位置するパプア島に位置する製油所拡張工事を訪問したときのことだ。日本人の同僚と二人で訪問したのだが、飛行機を二回乗り継ぎ、最後はフェリーに13時間乗って現場まで行くのだが、行くだけで1日半くらい掛かる。フェリーに乗り込む300人の中で外国人は同僚と私の2人だけ。出航前に、自分の番号を大声で呼ばれたら配給を取りに行くという軍隊さながらの儀式があったが、その時は不安しか無かった。その現場で過ごした過酷な一週間の話は書くとも長くなるので省略するが、帰りに立ち寄った地方空港で蒸気エンジン式ロードローダーが屋外展示されていたことも忘れられない。戦時中に使われたものと思われるが、こういった思わぬお宝に出会えることもこの国の魅力の一つだ。

最後に、私の大好きなインドネシアでは、新型コロナによる一日当たりの死者が1,000人を超えていることに胸を痛めている。今後共、インドネシアの安心・安全に微力ながら貢献したい。

—ふじもと じゅん

三菱商事(株) 建機・レンタル事業部 企画チームリーダー—